

木村達也で行くはじめての一步

ネコガミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

木村達也になった男がなんだかんだでボクシングを始めてチャンピオンを目指すお話。

目次

木村達也の一步	1
第2話『高校入学と初スパ』	5

## 木村達也の一步

気が付けば『木村達也』として転生してから15年の月日が経った。ところで木村達也と聞いて誰を思い浮かべる？

アイドル？ 拓哉じゃねえよ！ 達也だよ！

はあ：俺こと木村達也は『はじめの一步』ってボクシング漫画に出てくるキャラの一人さ。

一言で言うとう器用なボクサーだな。

悪く言えば器用貧乏で、これといった強みのないボクサーさ。

とは言っても俺もはじめの一步に詳しいわけじゃねえ。

ちゃんと知ってるのは木村と間柴の日本タイトルマッチと、鷹村とブライアン・ホークの世界タイトルマッチぐらいのもんさ。

とまあ、そんな木村達也に生まれ変わったんだが：今日までそれなりに楽しく過ごして来たぜ？

原作キャラの一人であり幼馴染みの『青木勝』に誘われて、小学校低学年の時に野球を始めたんだが：自分でもビツクリするぐらい試合で活躍出来たんだ。

なんせ初めての試合の第一打席で、いきなりホームランを打てたんだからな。

それを皮切りに野球が楽しくなってガムシヤラに練習をしてたら、気が付けば小学校を卒業する頃には世代最強のバッターなんて呼ばれる程に上手くなった。

ああ、野球が上手くなったのは俺だけじゃないぜ？ 青木だつて世代最強のピッチャーって呼ばれる程に上手くなったんだ。

そんな俺達は当然中学でも野球を続けた。

けど野球がつまなくなっちゃった。

理由は一つ：まともに勝負してもらえなくなっちゃったのさ。

それでも中学最後の大会では全国優勝を達成したけどよ、その頃には俺も青木も野球熱は完全に冷めちゃった。

あつ、野球は今でも好きだぜ？ 高校の受験勉強の合間に息抜きでバツセンに行くぐらいだからな。

けど、野球の試合は完全に嫌いになっちゃった。

小中通じてチームメイトだった桑原や清田に何度も高校野球で甲子園を目指そうって説得されたけどよ、俺と青木は首を縦に振らなかった。

だから高校受験も無事に終わった今日、俺はこの先どうするかを考えたのさ。



(野球とは決別する…これは決定だ。試合が嫌いになったのもあるけど、グローブやらスパイクやらで金が掛かるしな。けどよ、そしたら高校では何をやる?)

木村達也として15年生きてきたからなのか、前世の記憶はもう臆気にしかない。

(えっと、たしか原作の俺は不良になったんだっけか?…ねえな。母さんに迷惑は掛けられねえ。)

家は花屋をやってるんだが、店は母さん一人で切り盛りしている。俺が野球を始めた頃に親父は女の子を庇って交通事故で死んだから、これまで俺は母さんに女手一つで育ててもらった。

そんな母さんに迷惑を掛けるなんてありえねえ。

(青木には悪いけど不良にはならねえ。いや待てよ、そもそも青木が不良になるとは限らねえよな?)

そうだよ、俺が青木を野球以外に何か打ち込めるものに誘えばいいんだよ。

(何に誘う?…やっぱボクシングか?一応俺達が受験した高校にもボクシング部はあるが…)。

そうすると原作ブレイク…。

(いや、今更か。俺は間違いなく木村達也だが、原作の木村達也じゃねえしな。)

エネルギーを持って余してグレて母さんに迷惑を掛けるぐらいなら、原作ブレイク上等ってもんだぜ。

「うしっ！そうと決まりや青木に声を掛けに行くか！」

部屋を出て階段を下りると、花の手入れをしている母さんが目に入る。

「母さん、青木の所に行つてくるわ。」

「あいよ。あつ、達也ちよつといいかい？」

「ん？なんだよ母さん？」

「あんた、本当に野球をやめちまうのかい？」

母さんの問い掛けに頷く。

「お金の事は気にしなくていいんだよ？あんたが好きなら野球を続けな。」

「ありがとよ母さん。けどよ、もう決めちまったんだ。高校ではボクシングをやるつてな。」

「ボクシング？はあ…：やつぱりあんたはお父さんの息子だね。」

そんな母さんの言葉に引つ掛かりを覚える。

「母さん、なんでボクシングで父さんが出てくるんだ？」

「あの人もボクシングをやつてたのよ。それもプロでね。」

「…マジかよ。」

そんな話原作であつたか？

「お父さんは鴨川ジムつて所に所属していたんだけど、リングは男の戦場だからつて試合を見に行かせてくれなくてね。」

「そうだったのか…：父さんはどのくらい強かつたんだ？」

「世界挑戦を期待されてたわよ。東洋のベルトだつて持つてたんだから。もつとも、ベルトは日本タイトルのも含めてジムの会長の鴨川さんに預けてあるんだけどね。」

「だからうちにベルトがねえのか…。」

そりやわからねえわけだ。

けど待てよ？原作でこんな話は無かつたと思うが、これは俺が木村達也だからか？

…まあ、いいか。

原作は原作。俺は俺だ。そう思わなきや頭がごちやごちやし過ぎでやつてらんねえよ。

さつきも思っただけど原作ブレイク上等！これでいいじゃねえか。

「達也、母さんはもうあんたが野球をやめるのを止めないし、ボクシングをやるのなら応援するわ。だから、家の事は気にせず頑張んなさい。母さんは、あんたが頑張ってる姿を見るのが一番好きなんだからね。」

「きゅ、急に何を言い出すんだよ！ああもう！青木の所に行ってくるからな！」

「ふふ、行つてらっしゃい。」

顔が熱くなるのを自覚しながら家を飛び出して走った。

ちくしょう、母さんには敵う気がしねえぜ。

不意に足を止めて空を見上げる。

「見てるか、父さん。いや、もう転生しちまったかな？俺、ボクシングをやるよ。」

「そして母さんにベルトをプレゼントする。先ずはインターハイだな。いや、インターハイはベルトじゃなくてトロフィーか？まあ、それが親孝行になるかわかんねえけどよ、俺なりに母さんに親孝行するからさ。だから…安心して来世を楽しんでくれよ。」

## 第2話 『高校入学と初スパ』

side：木村達也

青木の説得に成功した俺は高校入学までの間、青木と一緒にトレーニングを始めることにした。

といってもトレーニングするのは基礎の身体作りだけで、パンチ系の練習はやらない。

素人の俺達が独学で練習をして変なクセがついたら面倒だからな。

それにしても……

「や、野球とは全然違うな……」

「ああ……そうだな……」

そう言つて青木と俺は地面に伸びている。

俺達はさつきまで野球の練習にもあつたペッパーをやつてたんだが、野球の時の様に回数じゃなくボクシングの1ラウンドに合わせた3分を2セットやつただけでこのありさまだった。

まあ考えてみりやこうなるのも当然だろうな。

野球は結構勘違いされやすいが瞬発力が重視されるスポーツで、ボクシングの様に持久力はそれほど必要とされるわけじゃない。

野球つてのはワンプレー毎に一度試合が止まる。つまり次のプレーが始まるまでインターバルがあるんだ。

だから重要なのは瞬発力と回復力なんだ。

もちろんある程度は必要だ。けどボクシングと比べたら全然だな。そんなこんなで俺と青木は主に足りない持久力の強化に努めていくと、あつという間に時間が過ぎて高校入学の時がやってきたのだつた。



side：青木勝



高校のボクシング部に入部して1カ月、今日は初めてのスパarringを行うことになったんだが、リングに上がった木村は1ラウンド目はまだリングに慣れてないのもあってまごついていたが、2ラウンド目に入ると対戦相手の先輩を圧倒していた。

「嘘だろ!? またカウンターが決まった!」

「本当に初心者かよ!」

先輩達は驚いているが俺からしてみれば当然の結果だった。

野球をやっていた時からわかってたんだが、木村はタイミングを取る天才だ。

どれだけタイミングを外そうとしてもピタッと合わせてきちまう。シートバッティングでは何度も悔しい思いをしたもんだぜ。

それにしてもすげえもんだな。ボクシングはまだまだ初心者なのにああも先輩を圧倒しちまえるんだから。

俺に出来るか? ……無理だな。

木村も知ってることだが俺はこう見えて繊細なんだ。自分のリズムを作れねえとどうにも上手くいかない。

そして今の俺は初心者だ。マウンドならともかくリングの上で自分のリズムを作る技術はねえ。

木村と違って俺は先輩にボコボコにされるだろうな。

「うわっ!? ダメだ! 完全にノビてる!」

「おいっ! バケツに水を入れて持ってこい!」

おっと、色々と考えてたら木村が先輩をKOしちまってたぜ。うん? アマチュアボクシングだからRSCか? まあどっちでもいいか。

ボクシングは野球みたいなチームスポーツじゃねえ。リングの上での出来事は全部自分次第……そう考えると、緊張と同時に興奮もしてきたぜ。

「おい青木、次はお前の番だ」

「はいっ!」

ヘッドギアをつけて準備をしていると、リングから下りてきた木村が声を掛けてきた。

「よう青木、ちよいと思いついたことがあるんだが、試してみねえか

？」

「あん？なんだよ思い付いたことって？」

「コークスクリユーブローって知ってるか？」

「コークスクリユーブロー？……たしか先月買った月刊ボクシングファンに載ってたな。」

「ああ、知ってるけどそれがどうした？」

「やってみろよ。たぶんお前に合ってるぜ」

木村の言葉に俺は首を傾げる。

「あれは日本人の体質には合にくいって載ってたぞ？」

「腕の外旋と内旋はピッチャーやってたお前にとっちゃ慣れっこだろ？」

「言われてみればその通りだな……よし、いっちょやってみつか。」

この日の俺は想像すらしてなかった。

まさか軽い気持ちで試してみたコークスクリユーブローが、俺のボクサー人生を通して使い続けるサンデーパンチになるなんてな。

あん？スパリングの結果？負けたに決まってるだろ。木村と違って俺は繊細なんだよ。